



TITLE:

帝國主義の經濟學(一) - J・A・ホブソンに関する省察 -

AUTHOR(S):

靜田, 均

CITATION:

靜田, 均. 帝國主義の經濟學(一) - J・A・ホブソンに関する省察 -. 經濟論叢 1953, 71(1): 50-62

ISSUE DATE:

1953-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/132282>

RIGHT:

經濟論叢

第七十一卷 第一號

明治前期の貿易政策	堀江保藏	(1)
中共貿易の諸問題	谷口吉彦	(21)
帝國主義の經濟學 (一)	靜田均	(50)
價值形態と價值實體	吉村達次	(63)
ドイツ獨占資本とベルリン六大銀行		
	大野英二	(79)
甘土料の基本的性格	柏尾昌哉	(104)

[昭和二十八年一月]

京都大學經濟學會

帝國主義の經濟學（一）

—— J・A・ホブソンに關する省察 ——

靜 田 均

一

十九世紀の七〇年代を境として、世界史が新たな段階に突入したことは、一般に認められるところである。すなわち先進諸國は、産業資本主義から獨占資本主義に轉化したばかりでなく、列強間における植民地獲得の競争はとみに激化し、戦争の危機はいたるところに昂まつた。ひとはこれを帝國主義の時代と呼ぶ。しかし帝國主義に關する眞に科學的な、もしくは理論的な研究は、二〇世紀にはいつてからはじめてつぎ／＼に現われたといつてよい。J・A・ホブソンの『帝國主義論』(J. A. Hobson, Imperialism, A study) はまさしくその最初のものである。今日ですでに立派な古典となつてゐる。帝國主義に關する學說史的發展を跡づけようとするならば、何人もまず彼の勞作を顧みなければならぬであらう。

ホブソンの『帝國主義論』が公刊されたのは、今世紀の冒頭すなわち一九〇二年のことである(石澤新一譯『帝國主義論』改造文庫 昭和五年)。ついで一九〇五年に第二版が刊行された。その後久しく絶版のかたちであつたが、一

九三八年にいたつて第三版が出た。この第三版は“entirely revised and reset edition”と銘うつてあるから全訂版とでもいうべきであらうが、本文そのものの内容は旧著とほとんど變りなく、ただ巻頭に新しく長い『序説』(Introduction)が書き加えられたのと巻末の附録に新しい統計が添えられたのが、目立つた相違にすぎない。この第三版に附せられた新しい『序説』は第一次大戰の終結から第二次大戰の前夜にいたるまでの、約二〇年間にわたつた列強の帝國主義的動向を取扱つたものであり、一九二六年ドイツの『社會學年報』(Jahrbuch für Soziologie, II Bd. 1926)に寄せた論文『帝國主義の新段階』(Die neue Phase des Imperialismus)とともに、彼自身の筆になる補論として注目にあたいる。

ホブソンは一九四〇年、八十一才の高齡をもつて永眠した。そして彼の死後、一九四八年に『帝國主義論』の第四版が刊行された。この最新版は、本文において第三版と變りはないけれども、第三版の新しい序説は含まれていない。なぜ削除されたのかは不明だが、しかし、これは惜みてもなお餘りあることであつて、わたくしはむしろ遺憾に思うものである。この點、最近に出た矢内原博士の新譯が、第四版を底本としながら、特に第三版の序説を附加されたのは、まことに當をえた措置といわねばならぬ(『帝國主義論上・下』岩波文庫、昭和二六年、同二七年)。

それはいずれにせよ、ホブソンの學說が、過去半世紀にわたる歴史の推移にも拘らず、理論構成の上であまり重大な修正を施されずに終つたことはたしかである。この意味においても、ホブソンの『帝國主義論』は、あくまで一箇の古典として見らるべきであらう。

元來、ホブソンはきわめて多産的な文筆家であつて、その著書は有名な『近代資本主義の發展』(The evolution of modern capitalism. A study of machine production, 1898)をはじめとしてまさに等身の觀があるが、なかんずく

『帝國主義論』が代表作であることは、いうまでもあるまい。それは彼以後の多くのひとびとに、すなわち社會主義者に對してばかりでなく、歴史家や政治學者に對しても、廣汎かつ深刻な影響を與えた点において、まことに記念碑的意義をもつ。一言でいえば、ホブソンの立場は平和主義的な改良主義の立場であり、國際協調主義の色彩が強く、フェビアン主義に屬するといえるが、帝國主義に對して痛烈果敢な論難を加えてやまず、その語調はすこぶる峻烈である。彼の『帝國主義論』が、『帝國主義的學說および實踐に對する古典的告發である』(P. T. Moon, Imperialism and world politics, 1926, p. 476) というムーンの言葉は、けだし適評といふことができる。

二

ホブソンにとつて直接の研究對象をなすものは、帝國主義一般ではない。いいかえると、人類のあらゆる歴史を貫いて生起した帝國主義が問題なのではなく、むしろ歴史的に限定された『近代帝國主義』こそが、彼の眞向から取り組んでいるテーマなのだ。彼はこれをしばしば『新帝國主義』と呼んでいる。

では、新帝國主義の起点はいつなのであるか。ホブソンはいう、『わたくしは便宣上一八七〇年をもつて帝國主義の意識的な政策の端緒を示すものとしたが、しかも八〇年代の半ばにいたるまで、運動がその張りきつたはずみに達しなかつたことは明白である。領土の夥しい増加とアフリカにおける廣大な領域をわれ／＼に割りあてた大掛りな分割方法とは、ほぼ一八八四年にはじまると見てさしつかえない』(『帝國主義論』民族主義と帝國主義)と。かくて十九世紀の最後の三〇年間における史實が、彼の『帝國主義論』の主たる例證とされている。けだし、近代帝國主義はこの時期において一應のクライマックスに達したからであり、また彼の勞作が二〇世紀の初頭に執筆された

からにはかならぬ。

ホブソンの近代帝國主義を實踐的な運動であり、意識的な政策であると解している。そしてそのかぎりにおいて、彼の把持する帝國主義の概念は、いちおう政治學的概念であると解することができよう。この場合、版圖の擴張政治的支配の外延的増大がさしずめ帝國主義の指標となることは、けだし當然の當然である。が、だからといって單なる政治的な動向のみが、ホブソンにとつての問題であるというわけではない。むしろ逆に、彼は政策としての帝國主義の根據をなすところの『一般的な諸法則を發見し、論議しよう』と努めているのである。

ところでホブソンの勞作を特徴づける帝國主義的政策の具体的例證は、主としてイギリスの史實に求められているのだが、しかしその根本志向は決して歴史的敘述におかれているわけではない。そうではなくて、むしろ診斷におかれているのである。彼自身の言葉をかりていえば、『帝國主義の社會病理學』たらんことを、それは期するものであつた。すなわちホブソンは、帝國主義を一箇の社會病理的現象と見るのであり、したがつて終始一貫つねに批判的な態度を堅持することを辭さないのである。彼は昂然として、『そこでは疾病の悪性を蔽わんとする何らの試みもなされてはいない』と。そしてこのことは、それだけですでに當時としては、驚歎にあたいする態度であつたであらう。なぜなら、當時は南亞戰爭を契機として帝國主義に關する辯護論や謳歌論が世論の支持をさえうけて臆面もなく横行闊歩していた時代であつたからである。二〇世紀の壁頭ホブソンの放つた反帝國主義的主張は、そうした凡百の言論に三斗の冷水を注いだものであつたに相違ない。彼はつねに一箇の異端者としてみずから任じていたのである。

ホブソンの『帝國主義論』は前後二篇よりなりたつ。第一篇は『帝國主義の經濟學』と題して、對象の經濟的側

面の分析にあてられ、第二篇は『帝國主義の政治學と顯して、對參の政治的側面の究明にさかれている。換言すれば、帝國主義を經濟と政治の兩面から考察しているのだが、兩者あいまつて帝國主義を統一的に餘ますところなく把握しようとする企圖にいずるものにはかならず。ホブソンの近代帝國主義を一面において『商業的帝國主義』とよび、他面において『侵略的帝國主義』と名づけるのは、ひつきよう近代的帝國主義の經濟的性格と政治的特徴を強調したものだといつてよい。

總じてホブソンの『帝國主義論』の特徴は、著しく論争的性格をおびているところにある。彼は多くの場合、まず帝國主義に關する辯護論ないし賛成論の代表的見本をかつげ、ついでこれに對して痛烈な反駁を加えるとともに進んで自説を展開しようと試みているのである。ホブソンの言説がただに鮮かな光彩を放っているばかりでなく、讀者の津々たる興味をそゝるゆえんのものは、實にこゝうした問題の提起と論争的性格に負うところ大である、とわたしはおもう。

以下、主として第一篇『帝國主義の經濟學』に即して考察を進めよう。

三

人口の捌け口として帝國主義を強調する議論がある。いわく、版圖の擴張はます／＼増大する人口の餘剩を吸収し、かつ利用せんがために望ましい、い必要でさえあると。この論旨をイギリスに適用してみよう。イギリスは世界中でもつとも人口の稠密な地域の一つである。その膨脹する人口は、本國內において充分に報酬のある職業を見出すことをえない。自由職業階級も労働者階級も、相當なそして確實な生活を営むことは、ます／＼困難となり

つゝあり、すべての労働市場は供給過剰であり、したがって植民は主要な經濟的必要である。かゝる壓迫に促されて過剰な人口がイギリス國旗の掲げられている國々に植民することは、焦眉の國民的利益である、云々。

かような見解と主張に對して、ホブソンは反對する。イギリスはドイツのある股賑な工業地帯やオランダや中國ほどに人口稠密ではない。最近におけるあらゆる人口増加にともなつて、食物およびその他の生活必需品を購買する富や力は遙かに多く増加した。のみならず、將來においても人口の過剰を惧れるにはあたらないであらう。よしんば産業の發達が、これまでどおりの急激さで進行しないと假定しても、統計の語るところでは、人口増加率は低下を示し、今世紀の半ばごろには停滯するであらうからである。かりに百歩をゆづつて、増大する過剰人口のために植民が必要であるとしても、多くの國帑を費し、大きな危険を賭す必要が果してあるかどうか、甚だ疑わしい。以上のごときがホブソンの主張の要點であるが、それを立證するために彼は、海外渡航者の數を統計にもとづいて推定し、移民が過剰人口の緩和策として、いかに効果の乏しいものであるかを明かにしている。

すなわちカナダ・オーストラリア・南アフリカを除き、それ以外の非ヨーロッパ地域に毎年送り出した移民は、せいゝく一〇〇〇ないし二〇〇〇であり、新附の熱帶地方における産業的植民者の數は、きわめて少く、トランスバールおよびオレンジ河植民地を除くと、『一八七〇年以來の獲得にかかる領土のどこにも、イギリス人の莫大な植民は行はれていないし、また將來かかる植民が行われそうにも見えない』。というのは、これらの地方の熱帶的特徴が純粹の植民を不可能ならしめているからであつて、わずかに少數の貿易業者・技師・宣教師・監督が、不安定な職業に従事しつつ、斷續的な時期をすごしているだけのことである。してみれば、植民すなわち移住という点から見た場合、新しい帝國主義はほとんど無價値であるといつてよい。〔帝國主義論第三章〕。

四

轉じて貿易と帝國主義の關係に移ろう。ホブソンによると、貿易からみた帝國主義の價值は、しばしば誇大に考へられている。しかし實際はそれほど價值があるわけではない。一見したところ數量から見ても、價格から見ても貿易は主要であり、國民の福祉にとつて必要不可欠のものであるにちがいないが、國民所得の中でしめる部分はいつてわずかなものである。十九世紀の末におけるイギリス國民の總所得はおおよそ一七億ポンドと見積られているが、試みに平常な年として一八九八年をとると、イギリスの貿易總額は七億六五〇〇万ポンドにのぼつた。かりにその五パーセントを利潤と見做すとすれば、貿易が直接もたらす年々の所得は約三八〇〇万ポンドであり、國民所得の四五分の一にすぎない。このほかなお貿易業者の雇用する商業使用人の俸給、事務所の家賃などを加算するとしても、しれたものである。

そればかりではない。統計の示すところによれば、十九世紀の最初の七〇年間においては、外國貿易が國內商業よりもより迅速に増加していたのに、最後の三〇年間においては、外國貿易は國內商業ほどめざましい増加を示さなかつた。人口一人あたりの所得は二〇パーセントも増加したのにひきかえて、人口一人あたり外國貿易の價額は減少したのである。

が、より重要な問題はおそらくこうであらう。版圖の擴張に費されたエネルギーと貨幣との夥しい支出が、外國貿易にくらべて帝國内部における通商がもつと發達したことによつて償われたかどうか、換言すれば、帝國主義的進出がイギリスをしてますます自給自足する大帝國たらしめることに寄與したかどうかである。が、これに關する

ホブソンの研究は否定的な解答に終らざるをえなかつた。

すなわち一八五五——五九年と一八九五——九八年とを比較するに、イギリスの輸出貿易と輸入貿易の比例も、諸外國とイギリス屬領の比例もほとんど一樣に何ら顯著なる變化を生じていない。このことは『わが近代帝國主義政策が外國貿易の決定に何ら重大な影響を與えなかつたことを意味する。換言すれば、版圖の擴張にも拘らず、イギリス帝國の内部における商業の比例の増加は少しも見られないのである。否、それどころではない。より精細な點檢を加えるとき『大ブリテンの帝國への貿易上の依存に増減がないのに、帝國の大ブリテンへの貿易上の依存は急激に減少しつつある』ことを見出す。版圖擴張が旺盛な活動を示した一八八四年から世紀末にかけてのより綿密な研究は、一層力強くこのことを語っているばかりでなく、一九〇一年の貿易統計は、『版圖の擴張がわが植民地および屬領との貿易を少しも増加せしめなかつたのに、諸外國とわが貿易の價值が著しく増加した』ことを告げている。むしろイギリスの外國貿易の最大の増加は、産業上の強敵であり、かつイギリスの帝國主義によつて政治的對立を生ずる惧れある一群の工業國すなわちフランス、ドイツ、アメリカに負うているというのが、事の真相なのだ。

最後に注意を要するのは、熱帶植民地と非熱帶植民地との相違である。ホブソンによれば、インドとの貿易をのぞき、最少の、價值の最も低い、かつ最も不安定な貿易は、熱帶諸領土との間に行われる貿易である。一八八四年以後のイギリス輸入貿易の唯一の顯著な増加は、濠洲、北アメリカおよびケープ植民地における『純粹の植民地』からである。インドとの貿易は停頓しつつあり、アフリカおよび西インドにおけるわが熱帶植民地とのそれは、多くの場合、不規則であり、かつ減退的であつた。

これを輸出貿易についていうと、濠洲およびカナダがイギリス製品への依存から逃れようとする決意を堅めつゝあるのを除けば、同じような一般的特徴を示している。熱帯植民地との貿易は幾分増加を示しているとはいへ、きわめて少額であり、かつきわめて不安定である。

かくしてホブソンはいう、『新しい帝國主義のもとに獲得されたような諸領土についていえば、一つの場合を除き、申分のない商業的資産と見做すことは、眞面目にはできない。わずかにエジプトだけが相當額のにのぼる貿易を行つているにとどまる』。しかも新しい熱帯植民地に輸出されるものは、その品質が最も粗悪であり、ランカシアの最も低廉な織物、バーミンガムおよびシェフィールドの最も低廉な金屬製品、火藥、火酒、煙草などよりなつてゐることは注目されねばならぬ。

以上のような論證の過程をへて、ホブソンの到達した結論は、こうである。いわく、國民所得のうち貿易からもたらされる部分がいたつて僅かなものであり、したがつて貿易の増進のために帝國主義に伴う莫大な失費と危険とを引きうけることは、すこぶる賢明ではない。とりわけ、獲得された新しい市場の大きさと性質とを計算に入れるとき、一層この感が深い、と。(同上書、第二章)

五

帝國主義の經濟的要因として、ホブソンのなканずく強調するものは、海外投資である。『資本のコスモポリタニズムの増大は、最近數世代における最大の經濟的變化であつた。あらゆる先進工業國はその資本のより大なる部分をば、自國の政治的領域の限界の外に、すなわち各國もしくは植民地に投じて、増大する所得をこの源泉から引

き出そうとする傾向を示しつつあつた』(同上書、第四章)。

一八九三年におけるイギリスの海外投資は本國の富の總額のはぼ一五パーセントを代表していた。その約半分は外國および植民地政府に對する貸付金の形態をとつており、他の大部分は政府によつて所有、管理もしくは事實上これに左右されている鐵道、銀行、電信およびその他の公共事業に投資され、そしてそのまた残りの大部分は土地、鑛山または直接地價に依存する産業に投資された。

ところで十九世紀の末葉におけるイギリスの海外投資は、概算二〇億ポンドと見積られるが、この事實からホブソンは二つの命題を導き出している。第一は、海外投資から利子としてもたらされる所得が、普通の輸出入貿易から利潤としてもたらされる所得を遙かに超過しているということであり、第二は外國および植民地貿易ならびにそれより生ずる所得が遍々として増加しないのに、海外投資からの所得を示す輸入貿易の分前が、きわめて急速に増加しつつあるということである。

ホブソンはさらに歩を進めて、『イギリスの近代外交政策は、ますます廣汎なる範圍にわたつて、海外からの貢獻をもつて生活する國家となりつつあり、そしてこの貢獻を享受する階級は、彼等の私的投資の領域を擴張しかつ彼等の現在の投資を防衛し改良せんがために、公の政策、公の財力、公の權力を行使せんとするます／＼増大する刺戟をもっている。これはおそらく近代政治における最も重要な要因であつて、それを曖昧に蔽いかくしておくことは、わが國家に由々しき危険をおよぼす』(同上書、第四章)。

以上の引用が端的に示すように、近代的帝國主義においては、商業的利益集團よりも金融的または投資的利益集團がより優越的な地位をしめることをホブソンは強調しているのであるが、しかしそれだからといって、資本輸出のみ

に決定的な重要性を認めて、商品輸出を輕視するというわけでは、必ずしもない。眞意はむしろこうである。いわく、『帝國主義なるものは、彼等が國內において賣却し、もしくは使用しえない財貨および資本を取りさるために海外市場ならびに海外投資を求めることによつて、自己の過剰なる富の流れのための水路を擴張しようとする大きな産業の支配者の努力である』(同上書、第六章)。

過剰商品および過剰資本の壓力が帝國主義を推進する重大な契機であることは、いちおう明かになつたとして、しかしかかる過剰商品および過剰資本がいかにして發生するかは、まだ少しも明かにされてはいない。が、根本的な問題はむしろこの点にある、といわなければならぬ。そしてこれに對するホブソンの解答は、資本主義社會における所得分配の不合理性にその根源を見出そうとするのである。彼は書いてゐる、『新市場および投資區域の開発を必要とするものは、産業の進歩ではなくて、國內に財貨および資本を吸収することを妨げているところの消費力の誤れる配分である』(同上書、第六章)。

すなわちホブソンによると、帝國主義の經濟的根底をなす過剰貯蓄は、地代・獨占利潤およびその他の不勞ないし餘剰所得部分からなつてゐる。それは頭腦または肉體勞働によつて得られたものでないから、正當の存在理由をもつていないばかりでなく、生産の煩勞に對して何ら自然的な關係をもつていないため、その獲得者に相當の満足を与えない。したがつて生産および消費の正常な節約において適當な地位をしめるにいたらないで、過剰貯蓄として堆積する傾向がある。かくして彼はきわめて素朴なる消費不足説に到達せざるを得なかつた。いわく、『もしこの國の一般消費者が、生産力のあらゆる向上と同じ速度を保つように、その消費水準をたかめたとするならば、市場を見出さんがために帝國主義を利用しようとして喧々囂々としている商品または資本の過剰は存しないであら

う。外國貿易はたしかに存在するであろうが、わが製品のわずかばかりの餘剰を、われ／＼が年々吸収する食糧および原料と交換することは、困難でないであろうし、またわれ／＼のなしたすべての貯蓄は、われ／＼が欲するかぎり、國內産業にその用途を見出しうるであろう』と（同上書、第六章）。

六

帝國主義の經濟的根源に關するホブソンの究明は、いちおう以上の展開によつて果されした。しかし、それだけではまだ帝國主義者を完全に論破したとはいいがたい。ホブソンは起りうべき三つの反論を豫想して、つぎの如くに述べている（同上書、第六章）。

第一は、イギリスの世界的地位の變化ということである。イギリスがある種の重要製造工業品のための世界市場を事實上獨占していた間は、帝國主義の必要は存しなかつた。しかるに十九世紀の七〇年以後、イギリスの製造工業および貿易上の優越は大いに損われた。他の諸國民、なかんずくドイツ、アメリカおよびベルギーは急激な勢をもつて進出し、彼等の競争はイギリスの地位をます／＼不安ならしめ、その前途を困難ならしめている。したがつてイギリスは新旧を問わず市場の確保のために『猛烈な手段』をとらねばならぬ。競争國が同じ目的で領土を占領し、併合してしまつた後は、イギリスを閉め出すであろう。かかる市場を確保し、また新たに開發する最も確實な手段は、合併するか保護領にするか以外にない。このため外交と武力に訴える必要が生じる。

第二、これらの市場の現在價値の如何は、かかる政策が、經濟的であることの究極的證據と見做されてはならない。帝國主義に伴う失費は、將來に對する投資であり、その果實を刈りとるものは子孫であると考えべきである。

新しい市場はさしあたり大きくはないかもしれぬ。だが、それでもイギリスの織物工業および金屬工業にとつては、有利な捌け口である。しかも今後アジアおよびアフリカの人口が増加したとき、貿易の急激な擴張は期して待つべきものがあるであらう。

第三、より重要なのは資本の壓力である。イギリスでは、有利な投資口を見出しえない莫大な節約が行われている。それはどこかにその用途を見出さなければならぬ。そうである以上、できるだけ多量にイギリスの貿易のための市場開拓とイギリス企業のための使用とに役立たしめることは、國民にとつての利益である。

以上の三点よりして、帝國主義論はつぎのように基礎づけられる。いわく、版圖の擴張はいかに高價であり、危険であつても、國民の永續的存在および進歩にとつて必要である。世界の開發を他の諸國民にみす／＼ゆだねようとなないかぎり、帝國主義はもはや選擇の問題ではなく必然の問題であると。

これに對して、ホブソンはアメリカやドイツ等における資本主義の急激な發展、企業結合と獨占の形式がいかに生産力の驚くべき膨脹と消費力の限界がある／＼な矛盾を露呈しているか、換言すれば、過剰商品と過剰資本の壓力が近代の國家を帝國主義的膨脹政策に驅りたてているかを指摘し、『生産方法のあらゆる進歩と所有および管理のあらゆる集中とは、この傾向を促進する』のであつて、ひとりイギリスだけの現象でないことを力説する。